ツバメ 追加 HO B 食事を終え、風呂に入った俺は自室のベッドに座っていた。

さっき、なにを言った?

「俺がいる」なんて、なんのためにここにいるのか考えれば、言ってはいけないのに。

いいや違う、あのときはこういう言葉をかけるのが正しくて――。いつもの嘘だ、必要な嘘だ。

「植物の前では正直になれる」と言っておきながら、俺は嘘をついたのか?

さみしいとこぼすルルに向けた言葉は、俺の――本心だった? もう、自分の心のありかが、わからない気がした。

それもそうだ。

ルルが墓参りに出かけている間、俺は、この家の中を調べていたの だから。

調薬室の錠前は重厚な作りで、とても簡単に壊せるものではなかった。

今の俺にあの扉を開けるすべはない。

鍵はいつもルルがポケットに入れていることは知っていた。

今日はよそ行きの格好をしていたから、もしかしたらと思って彼女 の部屋にも向かった。

中へ入ると、花のような香りに包まれて、少しだけ後ろめたさを感じた。

それを振り払うようにクローゼットを開けて、いつも着ている服を 調べたけれど、なにもなかった。

きっと持って行ったのだろう、使わない鍵を持ち歩く様子に違和感 を覚えた。

やっぱり、あの調薬室にはなにかがあるはずだ。

そう確信し、なるべく痕跡を消して、彼女の部屋をあとにした。

階段を降りれば、しんと静まり返った一階に、孤独を感じた。 思えば、この家にひとりになるのは初めてで。 彼女は両親を亡くしてから、この静寂の中、独りでいたのだろう。 それを感じたからこそ、震える彼女をどうにかしたくて――。

思考がぐるぐると巡る。考えがまとまらない。

患者にまっすぐに向き合うルルは、本心を隠す俺とは違う存在だと 思った。

けれど今日、ルルの胸の内を聞いて、触れて――彼女はそんなに遠 い存在じゃないんだって、気がついた。

だから、彼女の手に、髪に、触れられた。

「なにやってるんだ、俺」

それがうれしいと思うなんて、どうかしている。